

## ヒマラヤスギのオスとメス

科学博物館前の城南公園には、3月になると茶色でうすっぺらい破片のようなものがたくさん散らばっています(図1)。これは、ヒマラヤスギ(図3)のまつぼっくりがはじけ散ったもので、名前は、鱗片と種子です。

城南公園には8本のヒマラヤスギの大木があって、秋の終わりになると、このうち5本の木の枝に大きな卵のようなまつぼっくり(球果)がふくらんできます(図2左)。図1のものは、これが熟してばらけたものです。また、どの木にも白いイモ虫のような雄花がたくさん咲き、やがて茶色くなって木の下に落ちてきます。

観察すると、球果と雄花の両方をつける株(雌雄同株)が5本、雄花だけをつける株(雄株)が3本でした。



図1. 鱗片(上)と種子(下)



図2. 左側の大きな卵形のもものが球果、右側の白く立ったイモムシのようなものが雄花。

図鑑には、「ヒマラヤスギは雌雄同株」と書いてあります。では、ここにある雄株の存在をどのように考えればよいのでしょうか。

ヒマラヤスギは雌雄同株+ときどき雄株、と新しく理解するべきか、それとも、雄株にもそのうち球果が実って雌雄同株に落ち着くのか。

植物の世界では、年齢を重ねるか、栄養状態が良くなるとオスから両性になって実をつけるということがよくあります。3本の雄株も、今はそれなりに大きく育っているのに、近いうちに実をつけるようになるのかも知れません。ここは気長に待つことにしましょうか。(太田道人)



図3. ヒマラヤスギ

今月のかがくのギモン：針葉樹と広葉樹のちがいは？

(答えは当館ホームページを見てください)